

チノちゃんの叶わぬ恋

神チノ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ごちうさ本編見てね

チノちゃんのココアさんへの伝わらない思い

目次

初恋の相手への思い	—	1
ココアさんとデート!?	前半	6
ココアさんとデート!?	(後編)	11

初恋の相手への思い

「いらつしやいませ」

「これはとある少女の恋の話

「ご注文は？」

「えーと、カプチーノで」

「はい、かしこまりました」

「はあ、早くココアさんと二人きりになりたい

「お待たせしました。ご注文のカプチーノです」

「チノちゃんーん」

「仕事中は静かにしてください。で、何の用ですか？」

「オーダーお願いします。コロンビア2つとカプチーノ1つ」

「ココアさん、静かにしてください」

「ココアさんを怒って嫌われないだろうか。」

「そうだぞ、ココア。チノの言うとおりだ」

「えへ、怒られちゃった。てへへ」

「ココアさん、早くも持って行ってください」

　　その夜

「チノちゃんやー」

「何ですか、ココアさん」

「いい加減お姉ちゃんって呼んでよー」

「なぜですか？」

「もう姉妹何だから、良いじゃん」

「説明になってません。それに姉妹じゃありません」

　　急に何を言ってるの？それ以上のなりたいのに……あ、あれ？私何考えてるのだろ？

　　ああー。

「細かいことは気にしない、気にしない。あ、チノちゃん、お風呂沸いたよ」

「ココアさん、先にどうぞ」

「一緒に入るよ。ほら、行くよ」

　　ふああー。今日も入れる嬉しい。

「チノちゃん背中流してあげる」

　　やったー

「別に良いです」

「良いから、良いからあっち向いて」

「ひやう」

「ごめん。ごめん」

ココアさんの前で変な声だしちやた。嫌われてないかな？

「それじゃあ、お礼にココアさんの背中も流します」

「うふ、ありがとう」

ココアさんの背中、う、うれしいな

く寝る前く

ココアさんに抱かれ寝たいな。

「チノちゃん一緒に寝よう」

「断つても布団に入ってますよね？」

「えへへ。ばれちやった」

「ふふ、しようがないココアさんです」

「やったー」

「チノちゃん。明日は学校もラビットハウスも休みだし、夜更かししちやおうよ」

「夜更かしですか？わかりました今回だけですよ」

やったーこれで少しでも長くココアさんと話せる

「チノちゃん。まず何する？」

「パズルでもやりませんか？」

「良いね！それにしよう」

ココアさんがいかに真剣。ふふ、真剣な顔も可愛いなあ。

「チノちゃん。私の顔に何かついてる？」

「別に見てなんかいません」

あ、危ない。変に思われてしまうところだった。

あのピース取りたいなあ。でも遠いし。ココアさんにとつてもらおう

「ココアさんそのピースとつてください」

「どれ？」

「ココアさんの左の方です。もう自分で、とります」

「あ、」

「ご、ごめんなさい。上に乗っかってしまって」

「ううん、大丈夫だよ。チノちゃんは軽いし」

よかった嫌われてないみたい。ふああ、眠いなあ。でもココアさんともつと一緒にお

話したいなあ

「ん？チノちゃん眠い？私も眠くなってきちゃった。寝ようチノちゃん」

「おやすみなさい。ココアさん」
「おやすみくチノちゃん」

ココアさんとデート!? 前半

今日は一日中ココアさんとお話ができる。

「むにや、うにや、えへへ、チノちゃん…」

ココアさんに抱かれてる、もつとこのままでいたい。もうひと眠り… いや寝れない。

「ふああ、チノちゃん?」

「なんですか、ココアさん」

「起きてたの?」

え、いや少し前から起きてたけどそんなの言えない

「少し前だよ。」

「起きましょう、ココアさん」

「うん」

「朝ご飯作るので座っててください」

よし、今日も頑張らないと、ココアさんにおいしいって言ってもらえるように

「いいよ、手伝うよ」

「大丈夫です、一人でできますから」

私一人で作らないと意味がないので座っていてほしいです

「今日は失敗しないから」

「それを言って毎回失敗してるじゃないですか。それに今日はいつもよりおいしく作れますから」

「ほんとに!?楽しみにしてるね!」

やったーココアさんに喜んでもらえた!よく頑張りますか。

「できましたよ、ココアさん。運んでください」

「はーい。あ、おいしそうだね!」

「ありがとうございます」

「チノちゃん、今日は何がしたい?」

「なんでも良いんですか?」

「うん。いつものお礼だよ」

なんでも良いって?そんなこと急に言われてもないよ

「別にお礼を言われるようなことしてません」

「んー、細かいことは気にしない。なんでも良いよ、何かない?」

「じゃあ、買い物に行きたいです」

「わかった。用意ができたら行こうね」

「はい、ココアさんも用意ができたら行ってください」

ココアさんと二人きり!？で、デート? いやいや、何考えてるの。ああー早く用意してココアさんのところ行かないと。

「ココアさん用意できましたか?」

「できたよー、今行くよ」

ふあゝココアさん今日も可愛いなあゝ

「チノちゃん! 何が買いたいの?」

「洋服です」

「じゃあ、シヨッピングモールに行こう! あそこなら品ぞろえも良いし」

「るんる、るゝ、なんだか二人きりだなんてデートみたいだね!」

「!? そ、そんなことないと思います」

デートつてデート? えーココアさんと? それはとてもうれしいです

シヨッピングモールにて

「チノちゃん服選んであげる」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあさ、チノちゃんは私の選んでね！」

え？「ココアさんを選ぶ頑張らないと！」

「がんばります！」

「あ、これおいしそう！」

「食べていきますか？」

「うん」

（店内）

「チノちゃん別々で頼もう！」

「はい。良いですよ」

「やったー」

（商品届いて）

「チノちゃん。あーん。ほらお口開けて」

?! 間接キスですか？

「ほら、ほら。恥ずかしがらないで」

「あーんむ」

間接キスうれしいです

「チノちゃん。頂戴」

「はい。あーむむ」

食べてるところも可愛いなあ

ココアさんとデート!?(後編)

「店を出て」

「おいしかったねえ」

「はい。とつてもおいしかったです」

今日は嬉しそうに食べてるココアさんを見れてうれしいです。

「チノちゃん」

「はい。何ですか?」

「何をしにきたっけ?」

「ココアさんはもう忘れたのですか?しようがないですね…」

「あ、思い出した!チノちゃんの洋服を買いに来たんだった」

本当にココアさんはしょうがない。私がないと……つて何考えてるの私……

あ——

「チノちゃん。チーノちゃん?」

「な、何ですか?」

「チノちゃんが読んでも返事しないから。何かあったの?」

「特にないです」

「ふくん。じゃあ行こう!」

「ココアさん待ってください」

「チノちゃん早く早く!」

「ま、待ってください」

　　〳店にて〵

「チノちゃん30分後ここで見せ合いね」

「は、はい」

「よーい…スタート」

ココアさんを選ぶとは言ったものの、どんなのが似合うかな?もし選んで似合わなかったらどうしよう…:あー選んでいる間にどんどん時間がたってしまう…:んーココアさんに似合いそうな服は…:あ、これなんていいかも。あ、でもよく見たらココアさんには似合わなそうだなあ。他にはどんなのが…:

「チノちゃんどう?見つかった?」

「こ、ココアさん!もう時間ですか?」

「ううん。まだだよ。」

「良かったです。安心しました。私はまだ良いのが見つかりませんがココアさんはどう

ですか？」

「私の方もまだまだ。よーしがんばるよ」

ココアさんも頑張ってくれてる…私はココアさんのことを近くで見えてきた…私ならココアさんに似合う服くらいわかる！

～30分後～

「ココアさん時間です。決まりました？」

「うんちゃんと決まったよ！チノちゃんに似合うって自信あるよ！」

「私だつてありますよ」

「じゃあ、せーのだよ」

「せーの」

「わあチノちゃんが選んだ服可愛い。ありがとう！」

やった。ココアさんに喜んで。大好きなココアさんのことは私がかかってる！だ、大好きって…嫌いつてことじゃないけど…好きでもなくなっていく…ないし…

「チノちゃん？さつきからぼーつとしてどうしたの？具合でも悪いの？」

「別にどこも悪くないです。ただ考え事してただけです」

んっ

「な、何してるのですか？」

「んー?普通に熱がないか計ったただけだけど?」

「あ…そうですね」

「変なチノちゃん」

うう…:ココアさんに変って思われちゃった。話の流れを変えないと。

「ココアさんが選んだ服をよく見せてください」

「あ、そうだった。この服はとーとーとーとーとも自身があるよ。どう?」

「いいと思います」

「あ、そうだ!これ着てみない?」

「え?何言ってるんですか?」

「いいじゃないじゃない!どうせ買うんだから」

「いいですけど…それじゃあ先に買いますよ。それからなら」

え?あの可愛いココアさんがあの服を着たらもっと可愛くなる…:は!何を考えて

私

く会計を済ませてく

「せーのだよ!」

「せーの」

「と…」

「ふああ〜チノちゃん可愛いー写真撮ろう！」

「はい……」

ココアさんに可愛いと伝えられない……

「写真撮るよ！はいチーズ！ねえねえチノちゃんチノちゃん私どう？可愛い？」

「はい。可愛いと思いますよ」

「ふふふ。ありがとう」

「後で写真送ってください」

「ok！わかったよ。次どこか行きたい所ある？」

「じゃあ少し遊んでいきませんか？」

「どこがいいかな？あ、ゲーセンなんてどう？」

「いいと思いますよ」

そういえばゲーセンって初めて行くかもしれない。ココアさんは行ったことあるのかな？

「ココアさんはゲーセン行ったことありますか？」

「あるよ！チノちゃんはないの？」

「はい。実は初めてで」

「そっかじゃあ色々教えてあげる！」

くゲーセンにてく

「あ、これやってみよう!」

「なんですかこれ?」

「クレイニングゲームって言うてね。中の商品をあのアームでとるゲームだよ!」

「やってみる?」

「はい。やってみたいです」

ウイーーーーーーン。スカッ

「あはは。取れなかったか。じゃあ教えるからやってみて。手を置いて」

は、ココアさんが私の手の上にはあわど、どうしようもない

ウイーーーーーーン。ウイ。ウイーーーーーーン。ドンッ

「おー。取れました。ありがとうございます」

「今日はこの辺で帰りましょう!」

「うん」

く帰宅中く

「今日は楽しかったね!」

「はい。今日はありがとうございます」

「ごつちこそありがとね。また行きたいね!」

「いつ行きますか？」

「え？いいの？」

「楽しみだなあ〜！」

また、ココアさんとデートにこれる…また私変なこと考えている！

うう……

「チノちゃん？」

「何ですか？」

「顔が赤いよ。大丈夫？おでこ貸して」

「っ！なななにするんですか？」

「え？熱がないか確認したただけだよ。嫌だった？」

「別に嫌ってわけじゃ……」

「チノちゃん早く家に帰ろう！おなか空いちやった」

「いつでもココアさんはココアさんですね！」

そこも可愛い一面なのですが。

帰宅してご飯を食べ布団に入りある少女は嬉しく今日のことを思い出してるのであった。